

Clostridioides difficile トキシン PCR を用いた 2 段階アルゴリズム構築のための比較検討

◎松井 建二郎¹⁾、東本 祐紀²⁾、星 雅人²⁾
藤田医科大学病院¹⁾、藤田医科大学²⁾

【目的】

当院における *Clostridioides difficile* 感染症 (CDI) の診断は、イムノクロマト法を原理とした『GE テスト イムノクロマト-CD GDH/TOX (島津ダイアグノスティクス)』(IC 法) の結果と臨床症状で行っている。糞便検体におけるグルタミン酸脱水素酵素 (GDH) の検出感度は高いが、トキシン検出感度が低い事が知られている。そのため GDH 陽性・Tox 陰性結果では Tox 産生量が検出感度以下か Tox 非産生株かを区別する事は出来ない。そこで「*Clostridioides difficile* 感染症診療ガイドライン 2022」で提唱されている遺伝子検査 (NAAT) の導入検討と、ガイドラインに沿った検査体制の構築を目指した。

【方法】

IC 法により GDH 陽性と判定された冷蔵保存便 12 検体を用いた。GENECUBE 用試薬『ジーンキューブ *C. difficile* (東洋紡)』と GeneXpert 用試薬『Xpert *C.difficile* 「セフィエド」(ベックマン・コールター)』を用いて、各添付文書通りに測定を行い、IC 法の結果との比較検討を行った。

【結果】

IC 法は Tox 陽性 3 検体、Tox 陰性 9 検体であった。Tox 陽性 3 検体は GENECUBE と GeneXpert とともに全例 Tox 陽性で一致した。IC 法 Tox 陰性 9 検体のうち、GENECUBE は Tox 陽性 5 検体、Tox 陰性 4 検体となった。GeneXpert は Tox 陽性 5 検体、Tox 陰性 3 検体、測定エラーが 1 検体であった。

【結論】

2 種試薬は、IC 法 Tox 陰性から Tox 陽性 5 検体を検出でき IC 法より高感度であった。いずれの試薬も高感度かつ迅速に検出可能であり、NAAT は CDI 早期診断および治療開始、適切な感染対策において有用であると考えられた。

IC 法で GDH 陽性・Tox 陰性の場合に NAAT を実施するアルゴリズムを、2024 年 7 月から運用予定である。発表当日は運用後の結果も踏まえて発表予定である。

連絡先 0562-93-2304